

ゆかた きかた 浴衣の着方

ちゅうにちしんぶん ねん がつ なのか にちようばん 「なぎら けんいち い い してき
中日新聞003年9月7日 日曜版 「なぎら建壹の言う言う自適」より

この夏、お祭りや花火大会など、何ヶ所か夏の外に参加する機会があった。最近の

若者は和装離れが顕著であると聞いていたが、なんのなんの、今年はそうした場所で浴衣姿の女の娘を多く見かけた。

最近の浴衣といえば、帯なども簡易に締められるものが登場して、着物を着るのは大変だ、面倒くさいというイメージをぬぐい去ったからではなかろうか。

それにやはり女性の着物姿は楚々として結構である。女性がより女性らしく見える。と思いきや、地べたに足を投げ出し、ぐっぐっ座り込んでいる若い娘を見かければ、シは思わず「おいおい」と声をだしそうになった。

多少着崩れをしていたり、帯の締め方がだらしがないというのなら、まだどうにか目をつぶろう。いずれ慣れてくれば、うまく着付けをできるようになるだろう。しかし、地面に直接座り込んでいるなぐさぐさやたとえそれが姿勢だとしても納得できない。

「あ～あ」と嘆かわしく思っていると、両袖を肩口までまくりあげている女の娘の集団。

たぶん、男性がそんな様子で歩いているのを見て、まねをしてみたかったのに違いない。

だがもし、あれが格好いいと思ってやっているのなら、それは大いなる勘違いである。百歩

譲^{ゆる}っても、格好^{かっこう}よくはない。親父^{おやじ}が縁台将棋^{えんたいしょうぎ}を打^うっているわけではないんだから・・・。

着物^{きもの}を着^きると、所作^{しよさ}や歩き方^{あるかた}までが変^かわるといわれてきたのは、あれは一体^{いったいなん}何^{なに}だったのだ

ろう。下駄^げの代^たわり^かのヒール^あを履^はいて、大^{おお}またで闊^{かっ}歩^ぽする。あれでは

着^き崩^{くず}れていくのも仕^{しか}方^たない。

もっとも昔^{むかし}ながらの風習^{ふうしゅう}や伝^{でん}統^{とう}が希^{きはく}薄^{はく}になっていく今日^{きょう}、着物^{きもの}を見^み直^{なお}す傾^{けい}向^{こう}というの

は悪^{わる}いことではないと思^{おも}う。悪^{わる}いことではないのだが、やはり基^き本^{ほん}を守^{まも}ることは必^{ひつ}要^{よう}なので

はなかるうか。基^き本^{ほん}を知^しっ^てい^てい^ま今^{いま}様^{よう}だ^じすることや、そこ^{そこ}に個^こ性^{せい}を求^{もと}めることは、

それ^{それ}を知^しっているのと知^しらないのとでは、全^まく意^い味^み合^あい^{ちが}が違^{ちが}って^くるからである。